

肺非結核性抗酸菌症に対する外科治療後の再燃再発に影響する因子の検討

¹山田 勝雄 ^{3,4}安田あゆ子 ³関 幸雄 ²福井 保太
²八木 光昭 ²垂水 修 ²林 悠太 ²中川 拓
²山田 憲隆 ²小川 賢二

要旨：〔背景〕肺非結核性抗酸菌症（肺NTM症）に対する外科治療後の再燃再発に関する報告はまれである。〔目的〕肺NTM症に対する外科療法後の再燃再発に影響する因子を同定すること。〔対象〕2004年8月から2015年6月までの間に、肺NTM症と診断され3カ月以上の化学療法を行った後に手術を施行した92症例。〔方法〕再燃再発例と非再燃再発例を年齢、性別、BMI、呼吸器症状、診断から手術までの期間、起病菌種、術前排菌の有無、病型、術式、手術時間、手術時摘出組織の菌培養、残存病変の有無、術後入院期間、術後観察期間につき比較検討した。〔結果〕外科治療後の再燃再発率は22.8%で、年齢と菌種（*M. avium*）が術後の再燃再発に影響する因子であった。〔考察〕肺NTM症に対する外科治療の目的は病状のコントロールであり、再燃再発率が高いからといって手術が不適であるわけではない。術後により注意深い経過観察が必要であるが、比較的年齢が高い患者や*M. avium*症例でも外科治療により病状がコントロールできると考えられる場合は積極的に手術を施行すべきである。〔結論〕肺NTM症に対する外科治療後は、比較的年齢が高い症例と起病菌が*M. avium*である症例に対してはより再燃再発に注意して経過観察を行う必要がある。

キーワード：肺非結核性抗酸菌症，NTM，外科療法，手術，再燃再発，MAC